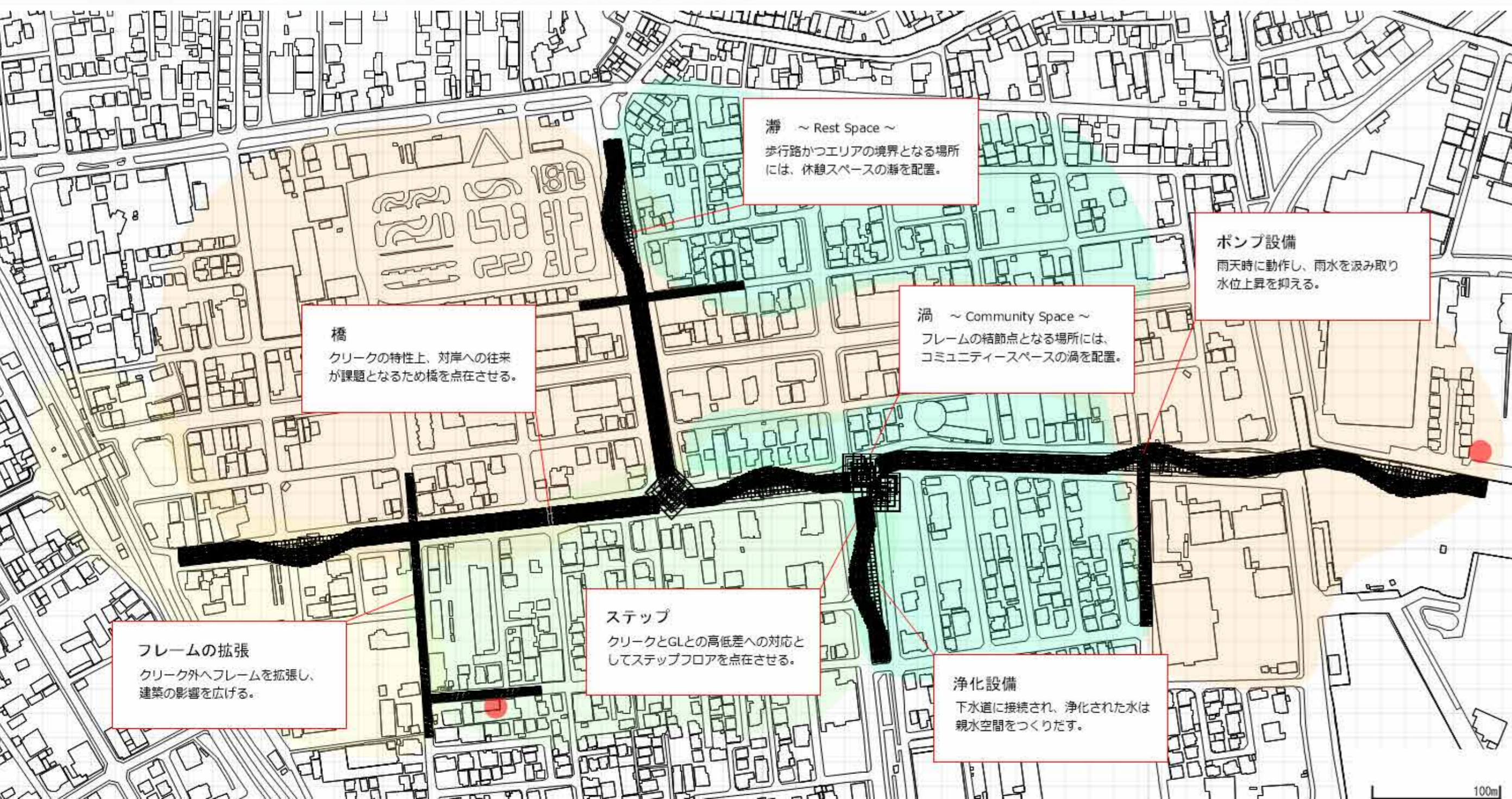


# クリークを編む 神原 陸人



## 1 敷地選定・背景・分析

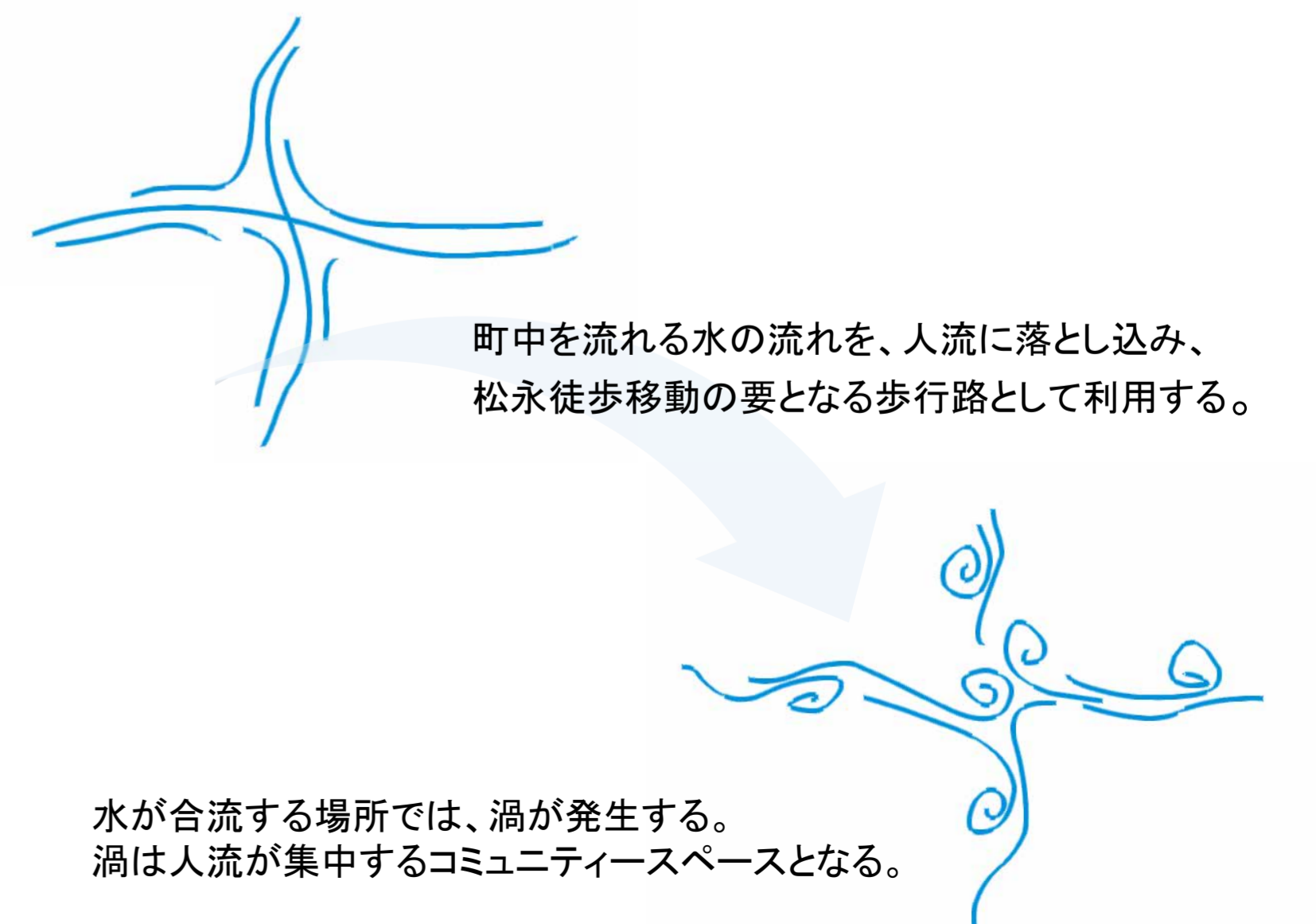
選定敷地は福山市西部、松永である。  
 松永はクリークが張り巡る都市構造となっている。

松永は江戸時代に塩田が築き上げられ、製塩業が盛んとなっていた。塩田を機能させるために必要なものが、海水を引くための水路と塩を炊くための木材である。この水路と木材を使い新たな産業が根付いた。それは、下駄づくりをはじめとする木工業である。  
 松永下駄は当時一般的だった高級木材を使った下駄ではなく、塩を炊くための安価な木材でつくられるため、安く大衆的であった。最盛期には年間5600万足を生産し現在も全国4割のシェアを誇る。  
 クリークはこの木材の輸送路として利用され松永下駄生産の後押しとなった。

フレームはエリアとエリアを繋げる橋の役割を持つと同時に、エリアの無作為な混同・拡張を抑制する境界的な建築となることでエリアの保存・保護の役割を持つ。  
 エリアの境界線に休憩・コミュニティスペースを配置することによって、エリアの混ざりからコミュニティが生まれる。

敷地南端と北西にある、赤丸は木材加工の工房であり、木材フレームを製作・拡張する際に巻き込んで、本計画のコミュニティのひとつとして取り込み、木材加工の技術継承をおこなう。

## 2 ダイアグラム



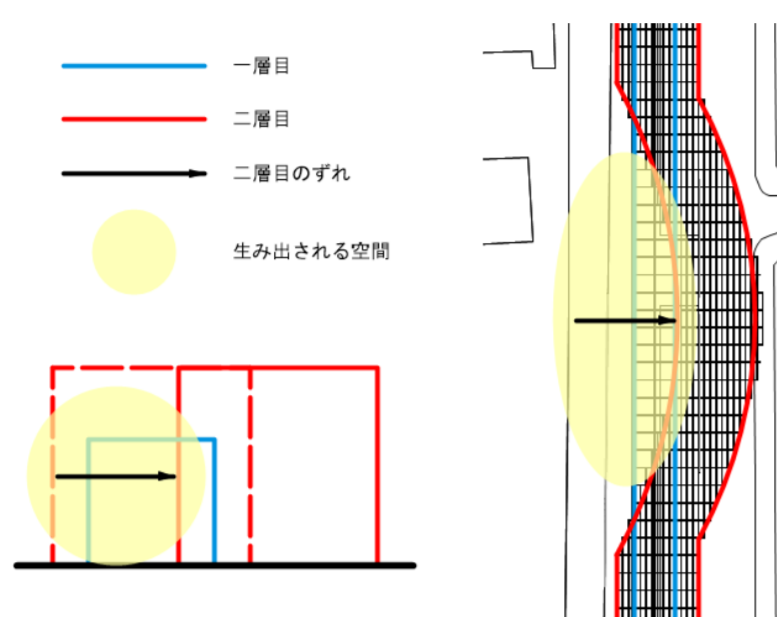
concept

地盤面下にあるクリークの存在感を周辺住民に知覚させ認識の共通化を図り易くするために、クリークの上部に空間的な立体化を行う。

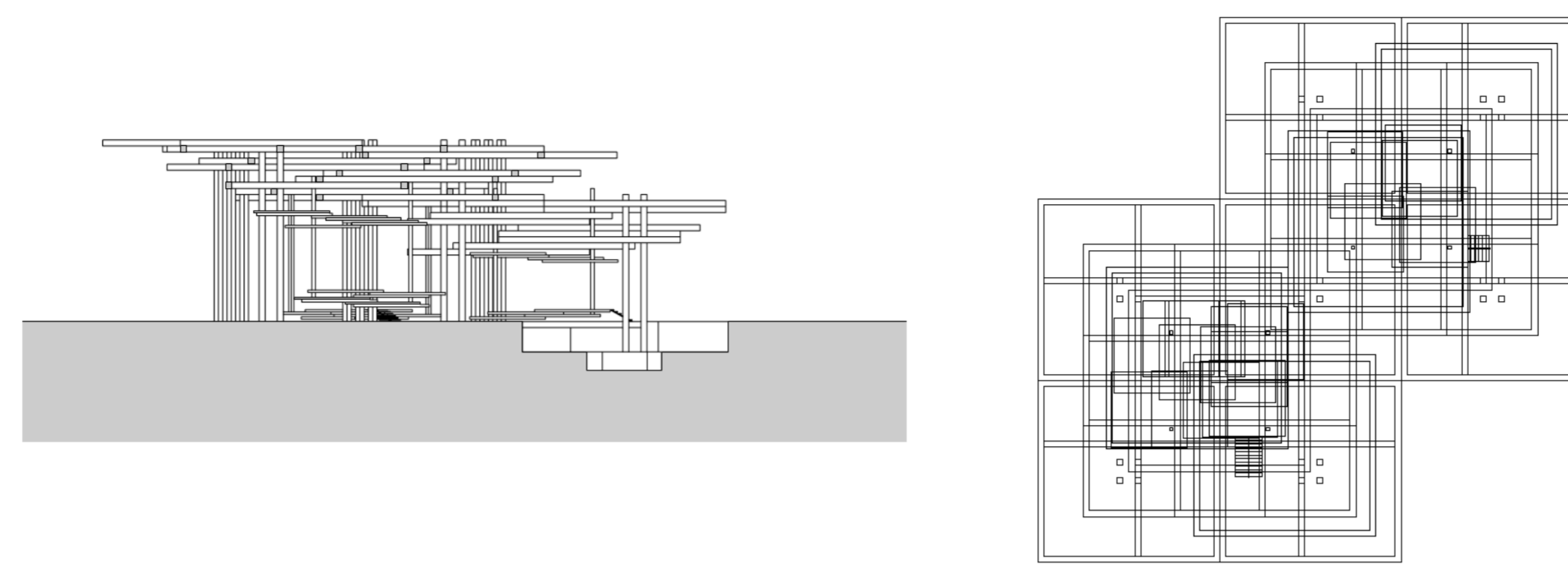
method

クリーク上に木材でつくられたフレームを張り巡らせ、クリークによって分けられた両側に視覚的連続性が得られるようにする。そこに、二層目となるフレームを加える。この二層目のフレームをずらしたり、大きさを変化させたりすることによって新たな空間をつくり出す。

- ・周辺の状況に応じてフレームを変化させ、多様な空間を創出させる
- ・周囲にフレームを拡張することで、町中にフレームを浸透させる
- ・クリーク内の空間を透過させ、周辺との関連性を持たせる

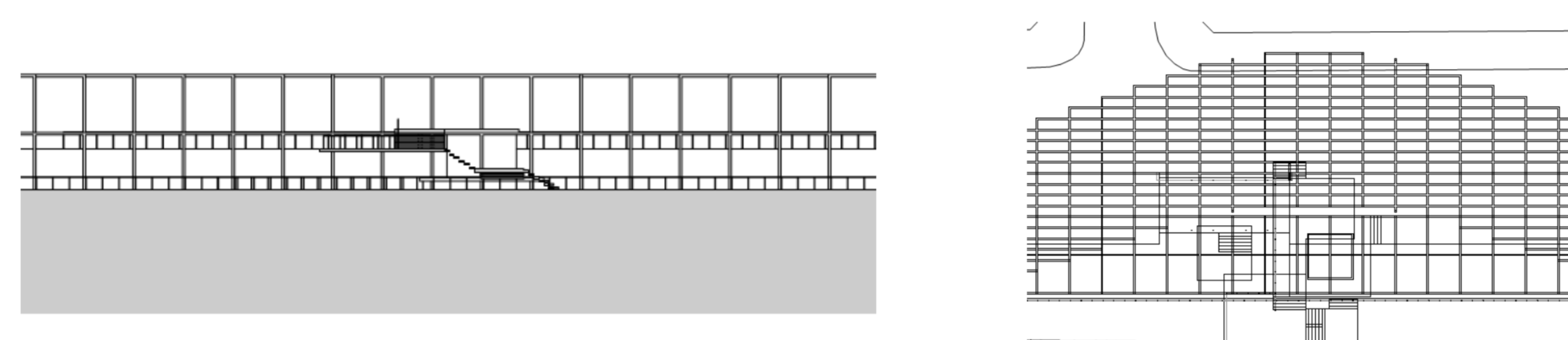


渦 ~ Community Space ~



瀬 ~ Walking Path ~

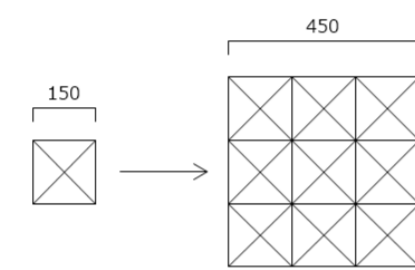
瀬 ~ Rest Space ~



4 建築概要

frame

フレームを構成する部材については150角の木材を使用する。渦については3×3で束ねて450角の部材として利用する。部材を重ね、渦のうねりを表現している。



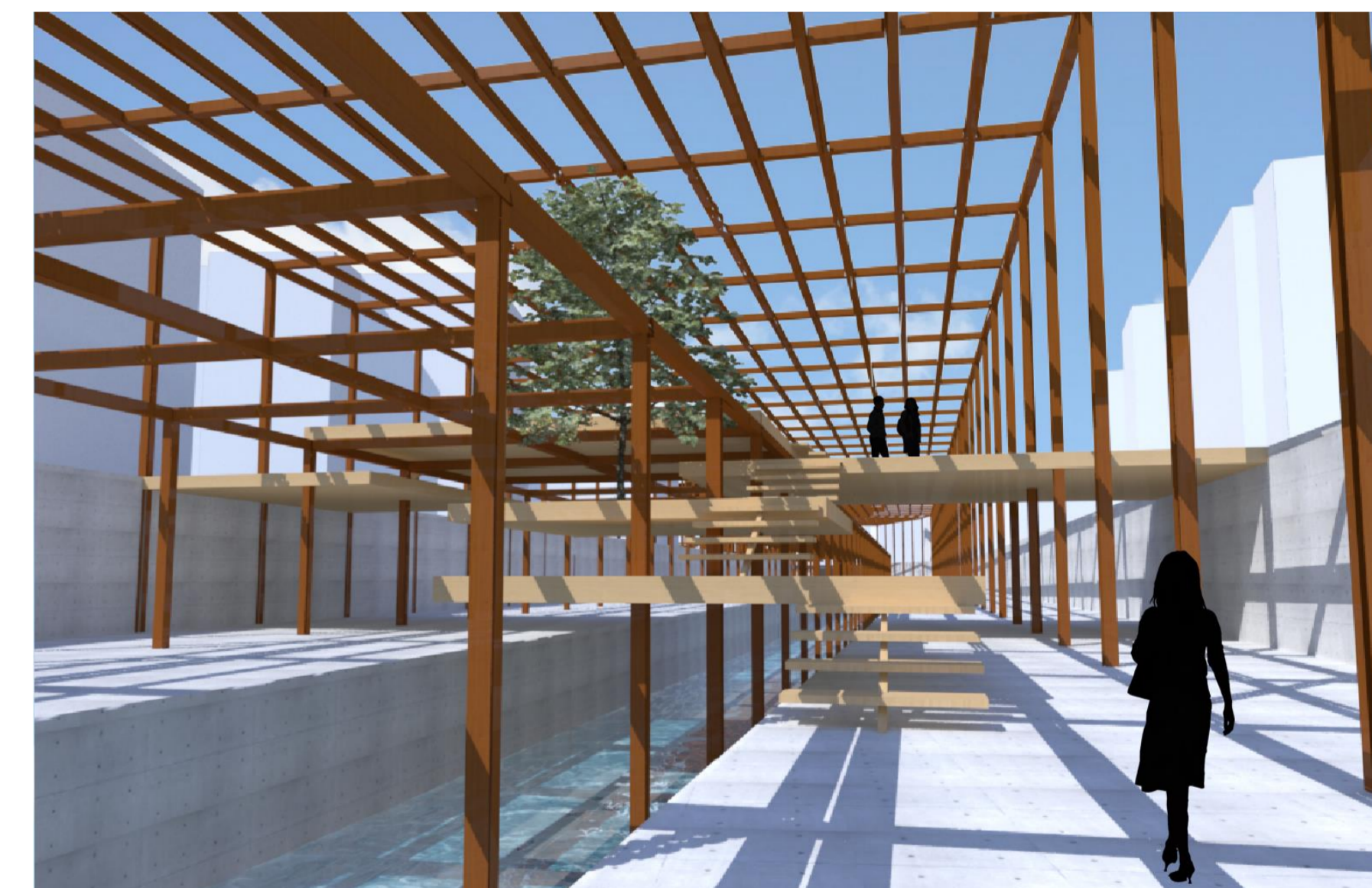
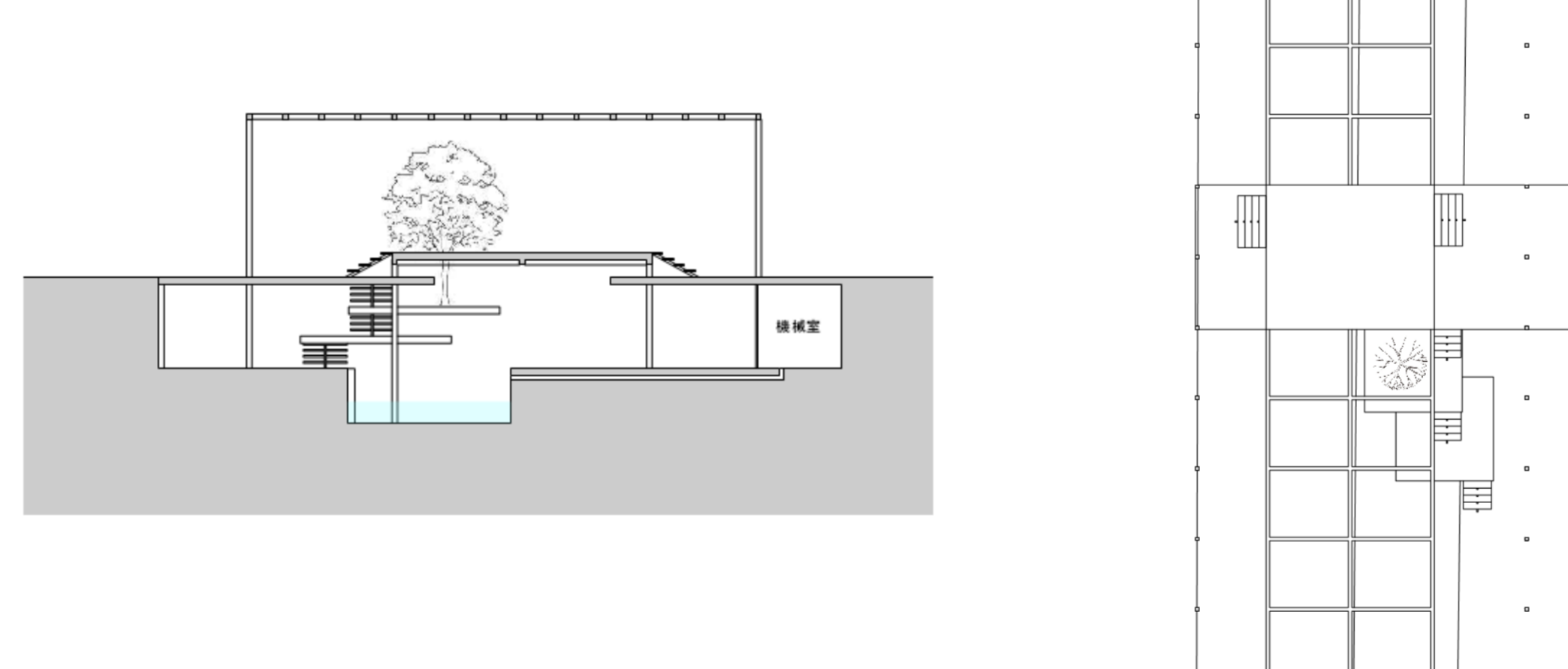
floor

フロアを構成するプレートは、フレームから吊ることによって支えられる。渦では回遊的にフロアを配置することで渦のうねりを表現した。瀬は高さ方向を意識しフロアに高低差をつけながら配置し、水面までフロア拡張することで親水空間を産む。

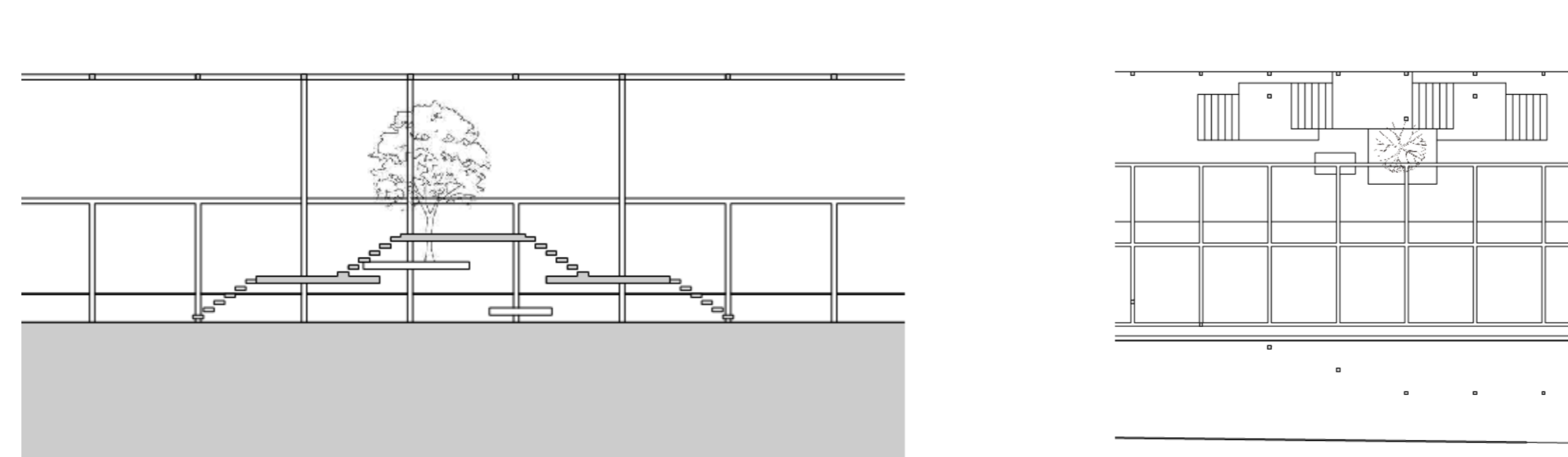
water quality

松永クリークは現在、雨水道として利用されている。そのため、水質の改善が課題となってくる。本計画では、水質改善の方法として、クリーク内に点検・維持管理が可能な合併処理浄化槽を点在させる。

~ Bridge ~



~ Step ~



5 プログラム

program

- ・まちなかの歩行スペース
- ・仕事または移動の休憩スペース
- ・親水空間
- ・地域のコミュニティスペース

community plan

木材文化継承のコミュニティー

松永ではゲタリンピックのように町をあげた祭があり、地域コミュニティーも最高潮を迎える。そのような場面で、一年ごと、時間をかけてフレームを編んでいくことで、町民を巻き込みつつ木材の加工技術や、木材文化を残すコミュニティーを形成する。

働き手と市民のコミュニティー

休憩スペースを通して、仕事の合間に休憩利用する働き手と歩行路を利用する市民とを繋げることができ、コミュニティーの形成を促す。

親水空間のコミュニティー

浄化設備によって浄化された水によって生まれた親水空間を通して、市民同士が交流できる。小さな公園のようなコミュニティーをフレーム内に点在形成する。